

# 『ビートル・モラリゼ』と ゴシック期フランスの死生観 (2)

—13世紀3巻本ヴァージョンを中心として—

黒岩三恵

## はじめに

『ビートル・モラリゼ』は、1ページに聖書抜粋とその意味講釈を対として、4対のメダイヨン形の挿絵を主体とする書物である(図1)。1210年代後半から20年代前半に最古のヴァージョンが成立し、以来、15世紀の末に至るまで、常にフランス王直々の意向を反映しながら新たな写本が作られた。現存する写本を見る限り、成立当初の『ビートル・モラリゼ』は、諸王の歴史物語と



図1

しての旧約聖書をわかりやすく説くことを主目的としたようである。しかし、最初の『ビートル・モラリゼ』のテキストが世俗語であったことは、お付きの聖職者の教授、読誦を経ずに、受容者が直接自分の目で見、読み上げることが当初から重視されてきたことを窺わせる。そして、時を経ずしてテキストがラテン語に変更され、ついで旧・新約の全書を備える体裁が整えられることになる<sup>1)</sup>。

前稿では、『ビートル・モラリゼ』の扉絵図像の展開と写本のレイアウトの観点から、創造主から発し、天地創造から最後の審判に至る時間軸が、この図解聖書の挿絵を通じて二重の鎖環の連なりとして表現されている、とする解釈を提示した<sup>2)</sup>。この論考では、左の解釈を踏まえて、聖書的な時空において、生と死が、あるいは生と死をめぐる観念がどのように捉えられているのか、という問いについて、考察することにした。

考察の対象とするのは、1230年代か1240年代に成立したと推定される、3巻構成の『ビートル・モラリゼ』である。トレド大聖堂が所蔵する3巻本（以下トレド写本と略記）と、オックスフォード、パリ、ロンドンに分蔵される3巻本（所謂OPL写本、以下OPL写本と略記）は、「歴代志上・下」と「バルク書」を除く旧・新約の全書を含み、後年のヴァージョンのもとともなる『ビートル・モラリゼ』の完成形を示すものと位置づけられる（図1）。5000コマ以上の挿絵を収録するOPL写本の体系的、網羅的な図像学的な分析には非常に困難が伴う。挿絵と聖句や講釈のテキストとの関係を考慮することはなおさらである。膨大なデータをどのように取り扱い、どのような結論へ導くのかについては、依然多くの課題が残る。ここで考察されることは、きわめて限られた資料に基づくものであることは、まず強調しておかなければならない。具体的には、本稿では、閲覧の便宜上OPL写本を中心として、対象を挿絵に限定した上で、以下の観点から考察を進めてゆく方針である。第一部においては、OPL写本の写本学的な概要に続き、聖書のどの部分がどのように選択されているのか、抜粋の選択に見られる特徴と、「道徳的」註釈に見られる特徴や違いの傾向を検討する。さらに、前稿で概観した、『ビートル・モラリゼ』が示す世界の成立から終末にいたる時間軸が、単に直線的なものではなく、歴史書、詩、予言、福音という書ジャンルに対応しながら、複雑な円環構造を見せることが解明されるであろう。第2部では、OPL写本における死生観について考察する。生と死を主題とする、キリストの生、死、

復活の図像と関連づけながら、『ビートル・モラリゼ』が全体として視覚化するキリスト教的な世界と時空の中で考察することになるであろう。挿絵のみを対象としながら、その分析も限定的である。個々の挿絵に認められる、円形枠内の構図に中心と周縁、上下と大小を区別する象徴的な意味を付与し、叙述的要素と寓意的要素のような次元の異なる事象を同一画面に描く方法や、人物像が手にしているものとか、身振りを始めとする視覚イメージの意味を担う細部の詳細な分析については、残念ながら触れる余裕がない。本稿では、聖書抜粋—意味講釈ないしはテキスト—視覚イメージを比較照合することを主体とした分析を通じて、『ビートル・モラリゼ』に見られる死生観の一般論として提示することにとどまることをおことわりしておく。

## 第1部 OPL写本における『ビートル・モラリゼ』の構成

### 1. OPLの写本学的概要

OPLは、テキスト、挿絵ともに、トレド大聖堂が所蔵する写本とほぼ一致することが確認されている。彩飾工房は異なるものの、様式的にはトレド写本と同時期の成立と考えられる<sup>3)</sup>。比較すると美術的完成度は拙速で低く、トレド写本がフランス国王自身のための制作であるのに対して、王妃のためか贈呈用のコピーであったとする仮説の根拠をなす<sup>4)</sup>。今日、ボードリアン図書館、フランス国立図書館、大英図書館が合計4つに分かれた写本をそれぞれ所蔵するが、トレド写本の比較から、ボードリアン図書館が所蔵する写本が3巻本の第1巻に、フランス国立図書館が所蔵する巻が第2巻に、大英図書館が所蔵する2冊がともに第3巻に相当することが判明する。現状の4巻構成において、各巻の写本学的な所見ならびに内容は以下のとおりである：

- ・ ボードリアン図書館、MS Bodley 270b [3巻本の第1巻に相当]。寸法420×300mm、224葉（欠損なし）。創造主（扉絵）に続き「創世記」から「ヨブ記」第40章第28節までを収録する<sup>5)</sup>。
- ・ フランス国立図書館、ms.lat.11560 [3巻本の第2巻に相当]。寸法413×300mm、222葉（2葉が欠損）<sup>6)</sup>。「ヨブ記」第40章第25節から「マラキ書」第1章第3節までを収録する<sup>7)</sup>。
- ・ 大英図書館、MS Harley 1526 [3巻本の第3巻の冒頭を収録]。寸法

400×280mm、28葉<sup>8)</sup> (冒頭の2葉が欠損)。「マカバイ書第一」第1章第57節から「マカバイ書第二」第14章第46節までを収録する<sup>9)</sup>。MS Harley 1527 [3巻本の第3巻の残りを収録]。寸法395×285mm、151葉 (少なくとも11葉が欠損)<sup>10)</sup>。新約聖書を収録。

彩飾は、ブラナーによる様式分析によって、少なくとも2つの工房による制作が考えられているが<sup>11)</sup>、ラウデンによれば、オリジナルと複製との間には相当の齟齬が見られるため<sup>12)</sup>、彩飾画家らの作業の分担状況は、今後、さらに分析、解明される必要がある。

## 2. 聖書の各書に見られる特徴

### 1) 抜粋の聖句の選択

ハウスヘアは、ヴァイツマンへの献辞を持つ論考において、この泰斗の業績を踏まえ、卷子本から冊子本へ書籍の形式の変更が、挿絵とテキストから構成される写本レイアウトにいかなる変更を迫ったのかを出発点とし、中世初頭に成立する多数の挿絵を含む創世記写本、テキストならびに挿絵の選択に独特の複雑な問題を投げかける福音書集、テキストと挿絵の関係が比較的単純な詩篇集について言及した後、3巻本形式の『ビープル・モラリゼ』では、どのような規則に基づいて、聖書から抜粋される聖句が選択されているか、大まかな見取り図を提示している<sup>13)</sup>。

それによれば、「ヨハネによる黙示録」が、156の挿絵により福音書記者が目にした幻視が網羅され、次いで、「雅歌」では110の抜粋と27ページ半を、「哀歌」では108の聖句と27ページを割いて、それぞれの内容がほぼ完全に視覚化されるのを除くと、そのほかの書では、所定の選択基準に基づいて、聖句の取捨が行われている、と指摘する。「黙示録」や「雅歌」におけるのと同様の比較的機械的な聖句の選択は「詩篇」で認められる。すなわち、150篇すべてのティトゥルスと冒頭の一句のみが抜粋と挿絵の主題として選択される。他方、ハウスヘアは残る書では、機械的な聖句の選択の可能性は小さいものの、その基準を明文化すること、立証することは容易ではないことを認める。旧約聖書の最初を占める「創世記」から「列王記」を経て「トビト記」、「ユデト記」、「エステル記」では、聖書の叙述は一連の歴史物語として把握され、重複する事象やテキストは省略される。「歴代志」が省かれ

たのは左の理由から説明できよう。また、出来事を字義通り描写することを原則として、会話や発話的な聖句は選択しない。長い叙述を持つ事件は、短縮される。この基準に従えば、論理上、歴史物語中の全事件を遺漏なく考慮することが可能となる。福音書では、キリスト伝として、4福音書の叙述を調和的に一本化する編纂が認められる。しかし、「書簡」では、聖句の選択の基準は解明が非常に困難である。

ハウスヘアの以上のような指摘は、おおむね妥当であろう。彼が予告している3巻本『ビブル・モラリゼ』に関するより詳細な論考は、残念ながら管見では未刊行であり、OPL写本のそのほかの書に関する言及はなされていない。以下に上記のハウスヘアの概要を補足する。OPL写本にのみ現存し、先行モデルであるトレド写本では収録されていない「マカバイ書第一・第二」、は、「創世記」から「エステル記」と類似の歴史物語的な抄録がなされていると考えられる。「ヨブ記」以下の4大預言書では、預言者の幻視を大なり小なり網羅的に選択する。これに対して、「列王記」と「トビト記」の間に挟まれた「エズラ書第一・第二」ならびに小預言書では、機械的に冒頭の聖句を選択し、図像化する。残る「箴言」、「知恵の書」、「伝道の手紙」では、聖句の取捨の基準は今後明らかにする必要があるが、「哀歌」、「雅歌」と同様、個別の箴言や歌を要約する網羅的な聖句の選択と視覚化が行われているといつてよいであろう。

さて、ハウスヘアの論考で興味を惹くのは、『ビブル・モラリゼ』中の「創世記」を検討すると、上記の選択基準をもととした聖句と挿絵に、『ビブル・モラリゼ』を聖書の図解抄録と考えるには重要な事件、事象の遺漏が目立つという指摘である。例として挙げられているのは、アブラハムとメルキゼテクの逸話など、重要な事件を複数含み、『ビブル・モラリゼ』における歴史物語の抄録が、必ずしも聖書の重要な内容をバランスよく収録することを主たる目的としたわけではないことが窺われる。特に本稿にとって興味深いのは、ハウスヘアがヴァイツマンとケスラーによる共著を引用しながら作成した、『コットン創世記』ならびに6点の『ビブル・モラリゼ』の挿絵の対照一覧表である<sup>14)</sup>。天地創造からバベルの塔の建設までの範囲の比較において、逐次的に「創世記」を挿絵化する『コットン創世記』と比較すると、『ビブル・モラリゼ』の挿絵、換言すれば聖句の選択がいかに独自なむらを見せているのかを解明する計4ページの対照表を見ると、『コットン創

世記』が視覚化し、『ビブブル・モラリゼ』が無視する聖句に、ラメク、セトといった人物の誕生と死が際立って目立つ。『ビブブル・モラリゼ』が生と死に対して、いかなる見方を示しているのかを端的に示すこの点については、本稿の第2部においてあらためて言及することになるだろう。

## 2) 書ごとの意味講釈の傾向

聖書抜粋とその挿絵は、各書の形式と抜粋内容に応じて、例えば「創世記」から「列王記」までは、複数のページにわたって連続する叙述を構成したり、「詩篇」や「雅歌」では、独立した内容を持つ詩句を、「エゼキエル書」や「イザヤ書」では、預言者が神より与えられた幻視やお告げを、時間軸に緩やかに沿いながら複数並置したりする体裁をとっている。聖書抜粋の聖句に対する意味講釈のテキストと挿絵は、前者と読み比べ、見比べられながら受容されることを目的とするが、その内容には、どのような傾向が見られるだろうか。

まず、歴史物語的に連続した叙述として構成されている「創世記」から「列王記」は、オーストリア国立図書館が所蔵する最初期の2点の写本以降、若干の欠損を除くとすべてのヴァージョンに共通して見られる要素であり、その図像学的な先行研究の蓄積が最も進んでいる部分である。これらの先行研究では、「現世」の墮落を、聖職者、ユダヤ人、異端者という教会を支えるか、教会にとって脅威となる社会の構成員に対する厳しい批判が、意味講釈のテキストと挿絵に際立って認められることが解明されてきた<sup>15)</sup>。個別的テーマを取り扱うこうした研究のほかには、伝統的な旧約聖書の解釈である予型論、寓意的解釈も重要な観点であり、また、死生観もまた、個別的テーマとして分析が可能ではあろう。ここでは、こうした各論を踏まえながら、時系列的な叙述性を持つ聖書抜粋の連続性と読者の視線の移動を考慮し、ページ全体のレイアウトにも目を配って、旧約の歴史書における意味講釈が持つ全般的な傾向を簡便に記すことを試みたい。OPL写本の第1巻から、「列王記第一（サムエル記上）」第30章第17節から第31章第5節までの4つの抜粋と挿絵、意味講釈と挿絵を掲載したページを例としよう（図1）。4つ聖書抜粋と挿絵の概要は、A.略奪された物や人の奪還、B.戦利品の平等な分配、C.ペリシテ人との戦いで負傷するサウル、D.サウルと彼の軍勢の自決、であり、連戦における勝利と敗北が連続する叙述として表現されている。これに対し

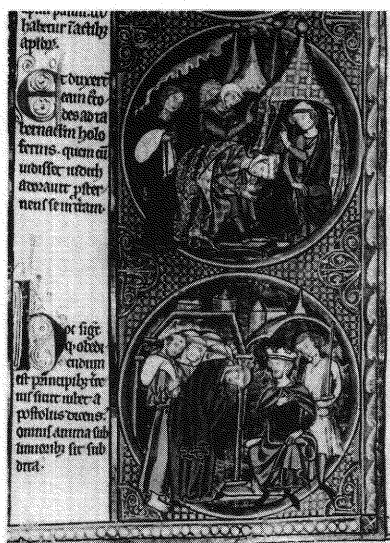


図2

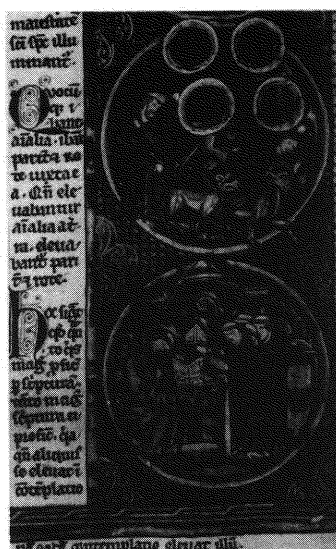


図3

て、意味講釈のテキストと挿絵の内容は、以下のように要約される。a. (ダヴィデのように捕らえられていた者を解放する) キリストの冥府降下とエクレシア (教会)、b. (戦利品を等しく分配するダヴィデのように) 万民を受け入れる神、c. (サウルを敗走させるペリシテ人のように) ユダヤ人を追放するキリスト教の信徒、d. (サウルのように) 追従により富を得、剣を自らに向けたために地獄へ堕ちる高位聖職者。括弧 ( ) 内に示したように、各意味講釈は組となる聖書抜粋と密接に関連して読まれるゆえに、聖書抜粋が有する叙事的連続性に連なる。しかしながら、a.b.c.d.の間には、何らの時間的連続性や内容上の関連は見出すことができない。旧約の歴史書において、最も多彩な内容の意味講釈がなされているのは、『ビブール・モラリゼ』の成立初期の意図が、旧約が「史実」として伝える人類の祖と、旧約の諸王の歴史から汲み取るべき意味を13世紀当時のフランス王に教授する目的を持っていたからと考えられる。『ビブール・モラリゼ』が旧・新約聖書全編を収録する体裁へと発展する過程において、各書から汲み取るべき意味が、変更された可能性は小さくない。実際に、歴史書以外の書の意味講釈を概観すると、歴史書ほどの多彩さに欠ける印象がある一方で、冥府降下、聖職者批判、ユ



図4

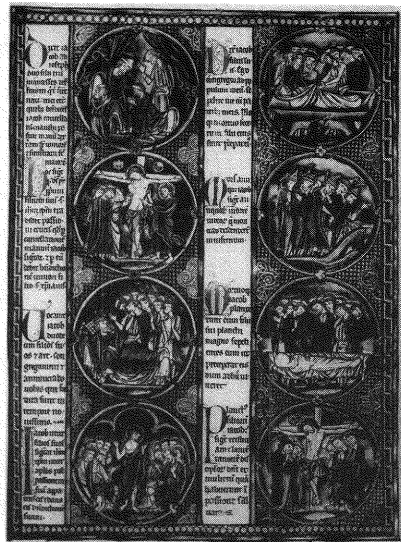


図5

ダヤ人への否定的な言説、神と信徒との関係、といった個別的主题は、様々な内容の聖書抜粋に随伴して繰り返し、多くのページで読者が遭遇するものに含まれる印象が強い。

こうした意味講釈は、聖書抜粋がいかなる内容であれ、繰り返し説かれるイデオロギーとして機能していると言える。他方、書の内容的な特徴から、「列王記」、「詩篇」、「箴言」、「マカバイ記」では、王が挿絵に描かれることが多く（図1-b）、「ルツ記」<sup>16）</sup>、「ユデト記」、「エステル記」では、女が肯定的・否定的な文脈の双方において講釈の対象となることが多い（図2）。「イザヤ書」や「エゼキエル書」では、寓意的な内容を、象徴的な形象を用いて表現し（図3）、「黙示録」では、ヨハネの記述が、神のいますマンドルラを中心とした位階的な構造として図式化される（図4）。意味講釈で取り扱われる主題のうち、予型論、教会の定義、ユダヤ人、異端、聖職者のあり方は、『ビープル・モラリゼ』のどの書でも認めることができる。特に、キリストの受難、復活、冥府降下、最後の審判は、最も多く描かれる図像と言ってよい。旧約聖書の意味講釈をまとめると、新約において成就される救世主の到来を予型論的に捉えたもの（図5、6-d）、旧約において叙述された事件を13世



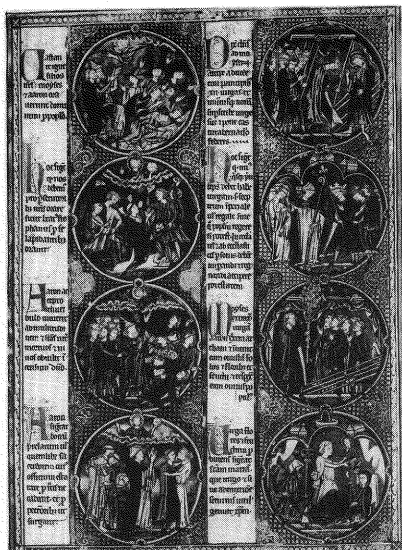


図6



図7

紀当時の現世を批判する文脈で注解するもの（図6-b, c）に大別できるが、予型論的主題には、キリストの復活、冥府降下からさらに未来を予言するような、死者の復活とキリストの再降臨、最後の審判における善人と悪人の選別が、含まれる。したがって、旧約の五書や歴史書のページでは、遠過去における「史実」を時系列的に記述するメダイオンと、キリスト伝を核とする新約という近過去、現世批判としての現在、来るべき最後の審判を核とする未来を表すメダイオン、さらには、時間を超越する教会や秘跡の意味を説くメダイオンとが対置される。聖句抜粋のメダイオンが一貫した時間軸を提示するのに対して、意味講釈では読者の視点に立てば、それぞれが特定の時空に位置づけられはするが、個々の抜粋の聖句や挿絵がそれとして意味するもの、その種々のレヴェルが反映されていると言える<sup>17)</sup>。

旧約聖書の以上のような傾向に対して、新約聖書では、いかなる意味講釈が見られるだろうか。OPL写本の福音書は、4福音書を歴史叙述的に編纂して、「ルカによる福音書」が叙述するザカリヤとエリザベツの物語から開始する。この冒頭部分を見ると、洗礼者ヨハネの両親の正しき行いや、少年キリストと博士たちの議論は、旧約の律法と新約の法の交代として解釈され、

挿絵では地獄へ堕ちるユダヤ人たちの姿によって寓意的に表される（大英図書館、MS Harley 1527、以下写本 L2、f.29Aa）。また、聖母は、講釈においてはエクレシアと解釈される<sup>18)</sup>（MS Bodley 27b、以下写本O、f.62など）。神殿奉納の際に祭司シメオンが幼子キリストを抱き上げるくだりや、東方三博士が贈呈する金、乳香、没薬は磔刑の予兆として講釈される（写本 L2、f.）。このように、伝統的な聖書解釈を尊重した意味講釈がテキストと挿絵で明示される一方で、聖家族のエジプトへの逃避は、ヘロデ王の刺客の手を逃れる聖家族のように、迫害者の手から逃れ街から街へ移動しながら説教をするドミニコ会修道士の献身的な活動として講釈される例が示すとおり、『ビープル・モラリゼ』が独自に編んだ、同時代的な教会の改革のコンテキストに即した内容が選ばれる（図7）。その多くは、托鉢修道会を称揚する内容を持つ。キリストの公生涯における説教や弟子たちを伴う布教活動は、ドミニコ会、教区聖職者、フランチェスコ会の活動に比較される（図6-b、c）。キリストの譬話は、信徒が送るべき正しい信仰の生活としてその意味が講釈される<sup>19)</sup>。このように、ユダヤ人への否定的な言辭、聖職者のあるべき姿、教会の寓意としての聖母、信徒の振る舞いなどといった意味講釈の主題は、一見、旧約の各書で見られたものと共通する。しかしながら、聖句抜粋と意味講釈の関連は、現世において実践されるべき信仰を福音から読み取る点において解釈がより直接的な印象があり、受容のレベルにおいて、新約と旧約では差異があったことも考えられるだろう。

「使徒行伝」ならびに「書簡」に記録される、福音を広める使徒たちの言行は、托鉢修道会、教区聖職者の活動の模範として意味講釈されることが目立つ。また、福音書記者ヨハネの幻視を通じて世界の終末と最後の審判の進展を逐次視覚化する「黙示録」の意味講釈でも、聖職者の行いが目立つという特異な特徴が認められる（図4、8）。

このように見てくると、フランス王または王妃を読者として想定しながら、聖職者一般への強い関心が意味講釈において展開していることが目を惹く。『ビープル・モラリゼ』を読むことを通じて、王たるものが模倣的にとるべき行動を学ぶことなく、教会を中心としたあるべき世界の秩序と正しい信仰を統治者として認識することが目指されているからと、一義的には解釈されるだろう。しかし、中世が古代から引き継いだ「鏡」の二面的な隠喩に従えば、鏡とは、人の限られた知性と感性を超越する世界像を見えるように

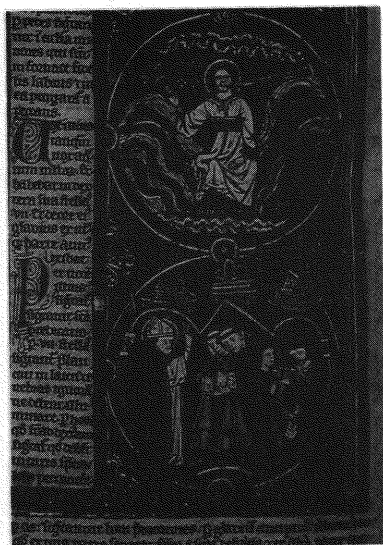


図8

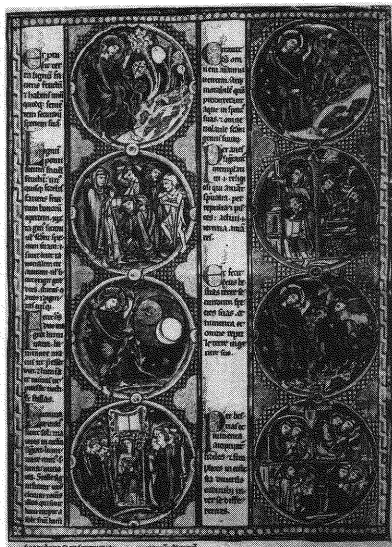


図9

提示するものであると同時に、自らの姿を映し出し、より完璧であるためにはどこを直せばよいのかを示す道具でもある。ドミニコ会やフランチェスコ会を称え、教区聖職者を批判する挿絵は、教会の改革に王もまた積極的な役割を担うよう、字義どおりに受け取ることも可能だが、金袋を抱え込み、酒壺をあおり、情事に耽る聖職者やユダヤ人ら、「不信心者」とテキストで名指しされる者どもは、寓意的に王が内に抱えているかも知れぬ悪徳を表し、これを正すように諭す機能も持っていただろう。直接に王が避けるべき悪徳を表すよりは、こうした婉曲表現が王にはよく受け止められたであろうし、王だけにとどまらない広がりのある現世批判としては、より適切な鏡であると解釈できるのではないか<sup>20)</sup>。

## 第2部 OPL写本における死生観

前節に見た『ピーブル・モラリゼ』が収録する聖書の抜粋が何であるのか、これらの抜粋に付された意味講釈がどのような内容を持つのかを踏まえながら、ここでは、特に生と死を取り扱った部分について検討することにしたい。

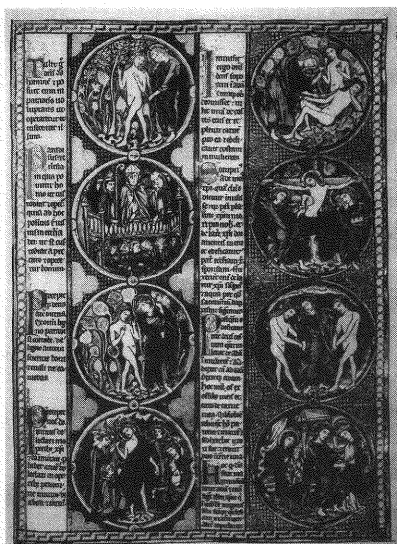


図10

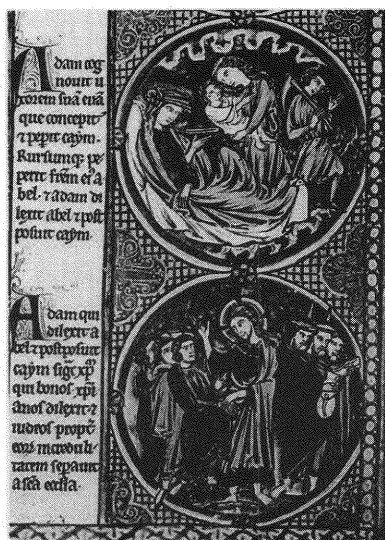


図11

## 1. 生と死に関連する主題

『ビープル・モラリゼ』において、生と死を表している主題には、どのようなものがあるのだろうか。挿絵で最初に描かれるのは、《空飛ぶもの、水棲のもの、植物の創造》(O写本、f.3v)であり、《四肢であゆむものの創造》である(図9)。動植物の創造は繰り返し描かれるのが印象的であるが、この、生命に溢れた楽園の中に、《アダムの創造》が描かれ、動植物とアダムの調和ある関係が強調される(図14)。ところが、《エヴァの創造》(図10)以降、緑滴る楽園の描写は影を潜め、ついで描かれる生に関する場面は、《カインの誕生》(図11)である。このように、従来、天地創造図像におけるテキストとイメージの関係として分析されがちであった『ビープル・モラリゼ』の冒頭の挿絵群であるが、動植物の姿をみずみずしく複数の挿絵に描いた楽園の図像は、原初の世界の理想的で調和ある自然を余すところなく伝えるものとして注目に値する。人の生と死に対象を限定すれば、原罪と楽園追放を境とする人類の創造と生殖の起源がまず『ビープル・モラリゼ』に登場すると見ることができよう。



図12



図13

死を主題とする最初の挿絵は、《アベルの暗殺》(図12)である。ついで、《エノクの死》が、OPL写本で選択される2番目の人の死の例(図13)である<sup>21)</sup>。《アベルの暗殺》は、人類による最初の死が殺人であることを明示する。対して《エノクの死》は、神とともに歩んだ者が死ぬことが、天使4人による導きによる昇天であることが明示されている。「創世記」テキストの記述を字義どおりに挿絵に採用しながら、聖句のどの部分を抜粋として選択し、挿絵にどのように表すか、作者が入念に構想を重ね、人が生き、死ぬことの起源と意味を、聖書に準拠しながらはっきりと表すことを意図したことが明らかである。

ここまで検討した挿絵は、聖書の抜粋を典拠としたものである。繰り返すが、聖書の抜粋のテキスト―挿絵の対として、これらの意味を講釈するテキスト―挿絵が対応するのが、『ビープル・モラリゼ』という絵解き聖書の最大の特徴である。意味講釈では、上記に挙げた生や死に関する諸場面は、どのように説明されているのだろうか。

《アダムの創造》は、土から創造された人類が簡素、理性的、慎み深い存在であることを、神の似姿にアダムが創造されたことは、高位聖職者が教会

に権威を与えるべき存在であることを示す、と講釈される (図14)。また、《エヴァの創造》は、十字架上のキリストの脇腹から、浄配エクレスシアが生まれ、脇腹から流れた水と血によって洗礼の秘跡が行われることを意味する、と解される (図10、Cc)。《カインの誕生》の意味講釈は、挿絵だけを見ると若干のずれを呈している (図11)。意味講釈のテキストと挿絵は、聖書抜粋テキストの後半の部分のみを主題とし、アダムがカインを遠ざけ、アベルを愛したことが、キリストが善良なる信徒を愛し、ユダヤ人を遠ざけたことを意味する、と講釈する<sup>22)</sup>。《アベルの暗殺》は、ユダヤ人によるキリストの磔刑の予型である (図12)。そして、《エノクの死》は、キリストが使徒たちを天へと導いたことを意味する、と講釈される (図13)。

以上の講釈を見ると、すでに伝統となっていた予型論に基づく講釈の比重が大きく、聖書抜粋において生や死を主題とするテキスト―挿絵は、意味講釈では直接に生と死の問題に触れる議論がなされていない、という傾向が明らかである。

アベルとエノクの場合のように、殺人と昇天が、人の死に関する最初の図像ではあるが、ヤコブの最期のエピソードが示すような寝室における死と埋葬の図像の方が、OPL写本ではしばしば表されるものである (図5)。老人のヤコブの死は、古き法の死、すなわちユダヤ人たちの滅亡を意味し、彼の死を嘆く家族は、キリストの十字架における死を悼む聖母や弟子、信徒たちに喩えられる。ここでも、旧約の偉大な人物の死が、キリストの死に比較される一種の予型論が認められる一方、人の死を制度の死に喩え、ユダヤ人たちが代表する古い教えの終わりへと解釈を広げる方法が並存する。同じページ上の2つの解釈が、互いに関連を持たない点では、『ビートル・モラリゼ』の意味講釈の傾向に従うものではある。だが、挿絵だけに目を向けてみると、同一人物の死から出発して、ヤコブの死すなわちユダヤの律法の滅亡とヤコブの死すなわちキリストの磔刑という、互いに相容れない解釈が同列に提示されるこのページのようなケースでは、仮に聖書抜粋のコマだけを追って歴史物語的な叙述が読まれることがあったにしても、聖書抜粋と意味講釈を交互に読み進めながら、整った教えの体系が徐々に構成されることがあったとは考えにくい。個々の聖書抜粋の意味は、あくまで個別的に取り扱われるべきものであるという前提があったことを窺わせる。

ところで、「ヨブ記」や「伝道の書」のように、預言の中に直接的な死や

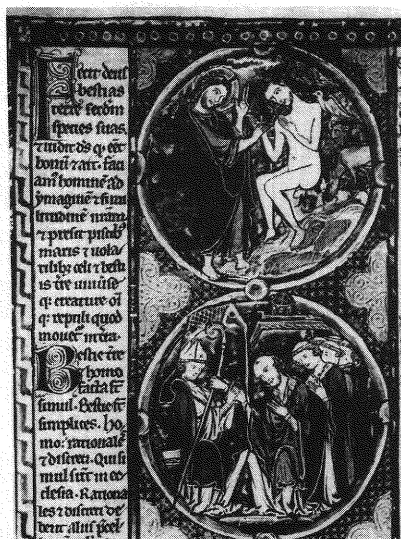


図14



図15

生への言及があるケースは特に取り上げる必要があるだろう。「ヨブ記」の第10章から第12章にかけて、ヨブは神が土をもって自分を象ったのに、いまや自分を滅ぼそうとしていることを嘆き、権勢を誇った者の儚さをうたい、樹木が枝葉を再生できるのに対して、人が花のようにすぐに散ってしまうと、友人に反論している（図19）。中でも注目されるのが、左列第2のメダイヨンaが提示する、「ヨブ記」第10章8—9節の講釈である。ここでは、人は女から生まれるが、土をこねて創造されたために、死ぬと腐ってしまう運命を背負っている、と講釈されている。また、「ヨブ記」第14章1—2節に準拠して人の命の儚さを嘆く、右コラム第1のメダイヨンは、原罪と樂園追放を表現するその下のメダイヨンによって、人が死すべき存在になってしまったことと関連づけられている（図15-Cc）。

「伝道の書」の冒頭のページでは、第1章2節を抜粋する「空」が晩餐と倒れた人として視覚化され、下の意味講釈においては、金貨を納める櫃の中に座り込んだユダヤ人風の男と、この男に天と棺とを指差すドミニコ会士が描かれる（図16-Bb）。続く抜粋（第1章4節）の「世」が、出産と帷子にくるまれて棺に安置される遺骸として視覚化され、意味講釈では、ユダヤ人と多神教



図16

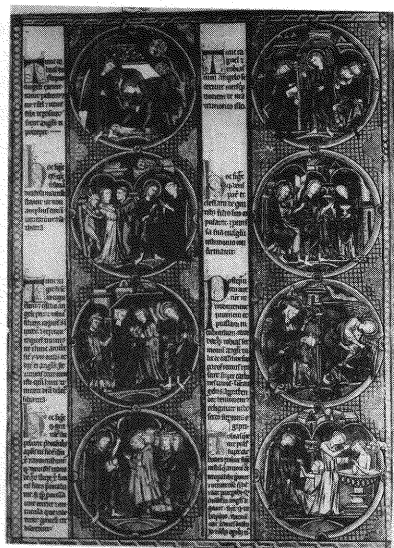


図17

徒の「世」に替わり、説教によってキリスト教会の「世」が天と地において行き渡ったことが表される (図16-Cc)。この様に、聖書抜粋の内容が直接生や死に言及する箇所はOPL写本では決して多いとは言えないが、それだけに、人の命の儚さ、死後の腐敗、あるいは空<sup>リニタス</sup>とは死であり、人の生き死によつて世代の交代が進むことが視覚化され、講釈を加えられているのは重要である。テキスト中に明記されていないにせよ、『ビープル・モラリゼ』の挿絵において繰り返し登場する悪しき行いとしての飲食や蓄財が、ひいては悪徳や7つの大罪が空であることを前提とするという解釈の可能性が開けるからである。

## 2. 生以降の生、死の彼方にあるもの

ところで、生とは、人が生まれてから死ぬまでの生涯と定義すると、OPL写本ではどう捉えられているだろうか。

聖書抜粋のレヴェルでは、ヤコブの場合のように、その死に至るまでの生涯が挿絵において表現されている例は (図5)、モーセ、ダヴィデなど、少なくない。これらは、上述のように、聖書抜粋やその挿絵が相互には関連しな





図18

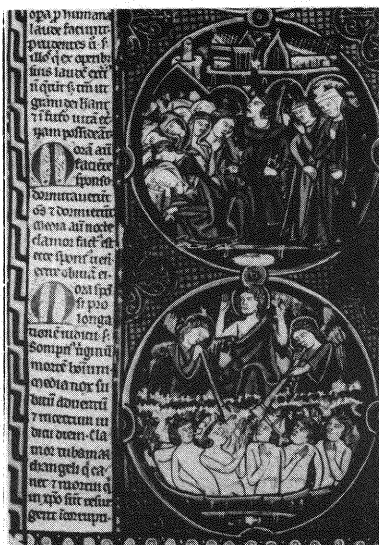


図19

い個別的な講釈を施され、人一人の生き死にといった生物学的な枠を大きく超えて、神学的な広がりの中で捉えられている。一方、意味講釈のレヴェルでは、聖職者、君主、一般信徒、ユダヤ人・異端者が、現世を構成する人々として描かれる。彼らは、正しい信仰へと導き（図4c、7、10-a、16-c）、敬虔な信仰を示す者（図1-b、5-d）、洗礼などの秘跡にあずかる者（図17-d）、賄賂を授受し（図16-d）、色欲に溺れる者（図17-a）として表される。教会の目から見た現世批判またはあらまほしき社会の姿は、教会の目から見た悪しき生または善き生を送る人々の姿である。労働や娯楽といった日々の営みを表す主題が、意味講釈の中に描かれることがないのは、こうした生活の活動が、聖書を寓意的・道徳的に解釈し、王の信仰生活の糧とするには、なんら重要性を持つとは認識されていなかったことを示唆するものとも言える。

一方、死は、ヤコブが死んで床に横臥するように（図5）、即物的に表現されることはむしろ例外的である。とりわけ、意味講釈における現世の人々にとっての死とは、魂が肉体を離脱して別の場所へ移動することによって表現される（図18）。伝統的な図像の決まりごとによって、裸体の小さな人物として表された魂は、天へ昇るか、悪魔にさらわれて地獄へ墮ちる（大英図書

館、MS Harley 1526、写本L1と略記、f.14v, d)。地獄には、裸体の小さな人物として表された人物が落とされ業火に焼かれるだけではなく、現世の姿をした人々が呑み込まれる場合もある（図1、14-b）。天は、神や魂が上半身を覗かせる、輝く雲の上として表現される（図4、13、16）。上に天を、下に地獄の釜を配した一種の宇宙図も、最後の審判の図像としてしばしば描かれる（図14-c）。しかし、最後の審判の図像としては、地上における死者の復活を描いたものもある（図19）。また、キリストが復活後に冥府に降りて、閉じ込められていた人類を救い出す《冥府降下》の図像は、上述の地獄へ堕ちる者の図像と同じくらい頻繁に登場する（図1-a）。

## 結語

13世紀は、大聖堂西正面扉口のティンパヌムが典型的に示すように、《最後の審判》の図像が、ロマネスクのそれを継承、発展させ、死と復活、魂の裁きに重きが置かれた時代として知られてきた<sup>23)</sup>。13世紀の『ビープル・モラリゼ』の挿絵においても、大筋では同様の死生観が窺えると言える。OPL写本における生と死をめぐる図像や、それが表す意味は、数量的には決して多数とは言えないが、上述のごとく多様な表現を見せ、聖書抜粋におけるだけではなく、むしろ意味講釈のレヴェルにおいて展開されている。自然豊かなエデンの園を追放されてから、人類は子を産み、死んで、世代交代を繰り返して地に満ち、ユダヤ教の世からキリスト教の世に遷り変わった。旧約の時代においても、当世においても人は正しい行いと悪しき行いをなし、それは死後の魂の行方を左右する。OPL写本では、左のような、キリスト教の教義に基づく死生観によって貫かれていると見なすことができよう。人間が生き、死ぬことの生物学的な観点、生死の身体性についてはほとんど触れられてはいない。しかし、13世紀半ばに制作されたOPL写本において、「ヨブ記」、「伝道の書」に述べられていることを字義通りに引用する形とはいえ、身体が腐敗しやすく、儚いものであることが挿絵として視覚化され、講釈が加えられていることは（図15、16）、図像としては例外的である生死の物質性、身体性への視線を、パリ大学ほかの神学者たちが持ち合わせていたことと、王とその近親者が読むことを目的とした絵解き聖書にふさわしい主題であると考えられていたことを示唆する。講釈を通じて抽象化されてはいるが、生

身の人間を決して13世紀の聖書解釈も宗教美術も無視していたわけではないことを示していると言えないだろうか。

【註】

- 1) 『ビープル・モラリゼ』の成立に関し、現存する最古の写本が制作された年代に関しては、確固たる仮説は定まっているとは言い難い。13世紀初頭のバリで展開した聖書解釈学史を根拠に、早くも1208-1215年に制作されたとするのはタチャウである。Tachau, 1998, 7頁参照。やや遅れて、様式的な見地からブラナーが1215頃から1220年代の成立とするが(Branner, 1977, 48頁)、様式に基づく仮説としては、現在、1220年代とするのが主流となりつつある。ただし、注文主をフィリップ2世とするカルイ8世とするかで年代の解釈に依然として幅が残る。タチャウ以外の美術史研究者による制作年代の研究史についてはLowden, 2000, I, 4—5頁および50—54頁参照。
- 2) 「『ビープル・モラリゼ』とゴシック期フランスの死生観(1)」、『死生学研究 2003年春号』、275 (118) —241 (152) 頁。
- 3) ハイマンが提唱したトレド写本成立後10年程度後にこれをモデルとしながらOPL写本が成立したとする仮説は、両写本の実地調査から、アールフィレ、ラウデンから疑問視されている。Lowden, 2000, I.
- 4) トレド写本とOPL写本の関係に関しては、Lowden, 2000, I:140, n.6, II:201-202参照。
- 5) 写本学的所見は、Lowden, 2000, I:141-143を、収録内容はDeborde, 1911-1927を参照した。
- 6) 同上書、145—146頁。
- 7) Laborde, 1911-1927, II参照。なお、ラウデン、同上書、146頁では、「ヨブ記」第41章第6節から開始するとする。
- 8) 現行のフォリエーションでは、遊びからフォリオ番号をつけており、本文28番目のフォリオはfol.31と表記されている。ラウデン、同上書、146頁。
- 9) Laborde、前掲書。
- 10) MS Harley 1527の制作時の混乱については、Lowden、前掲書、148—151頁、181—187頁。
- 11) Branner, 1977.
- 12) Lowden, 2000, I, 前掲書。
- 13) Haussherr, “Über die Auswahl des Bibeltextes in der Bible moralisée”,

*Zeitschrift für Kunstgeschichte* 51 (1988):126-146.

- 14) 同上書、134—137頁。
- 15) これら先行研究に関しては、註1)に掲載した前稿を参照。
- 16) 7つの『ビープル・モラリゼ』における「ルツ記」のテキストの典拠、変更箇所、テキストと挿絵の関係を比較する研究としては、Lowden, 2000, II参照。
- 17) こうした意味講釈の源泉は、より直接的には『ビープル・モラリゼ』の作者が参照した聖書解釈に求めることができよう。Haussherr. 実際にどの解釈者の著書がどのように利用されたのかについては、さらに詳しい研究が待たれる。『ビープル・モラリゼ』の円形の挿絵は、スタンドグラスとの類似と並行して、鏡とも類似する。ヴァンサン・ド・ボーヴェが『ビープル・モラリゼ』の作者であるとする仮説は、典拠の多様性といささか一貫性を欠く引用のゆえに否定されている。しかし、人間が直接知覚することが不可能な事象を反射するものとしての鏡の隠喩は13世紀初頭には、すでに確立しており、他方『ビープル・モラリゼ』が実質的には『君主の鑑』であるとする解釈はそうした理解を反映しているものと言えるだろう。Tachau, 1998参照。中世における鏡の比喩と中世文学の一ジャンルとしての鏡に関する論考としては、Jonsson, 1995参照。
- 18) しかしながら、挿絵においては、女性の寓意像として表現されるよりは、教皇や司教を頂点とする組織としての教会が描かれているケースの方が多い。例えば、MS Bodley 270b, f.11、コマD-d<東方三博士の礼拝>—<聖堂内で磔刑像に礼拝する信徒たち>のような例がある。
- 19) 例えば、MS Harley 1527, f.21, Dd; f.23, Bb; f.28v, Dd; f.30v, Dd; 47v, Cc, Dd など。
- 20) Jonsson, 註17)、前掲書参照。
- 21) このエノクは、カインの息子であるエノクではなく、挿絵左の聖書抜粋のテキストからも窺えるとおおり、「年は合わせて365であった。エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたのでいなくなった」と記述される、ヤレドの子、メセトラの父である。
- 22) このような聖書抜粋と意味講釈間の、テキストと挿絵間のずれは、OPL写本において散見されることが複数の研究者によって指摘されている。『ビープル・モラリゼ』の最初のヴァージョンであるウィーン国立図書館、ONB2554以来、時代が下るにつれウルガタ聖書に準拠するテキスト校正が徹底され拡充されたのにもかかわらず、挿絵には対応するような修正が行われなかったことが一因である。また特にOPL写本では、短い期限内に3巻本

を完成させる必要から、筆致が拙速であるにとどまらずテキストと挿絵の双方に写しまちがいが頻繁に生じてしまったことが重なって、結果として読解不能な箇所が多くなったと考えられる。Christe,1999、331頁参照。こうした事情を踏まえると、先行作例との照合が不可欠ではあるが、《カインの誕生》の意味講釈が、神がカインを遠ざけアベルをより好んだことを主題としているのは、挿絵とテキストが「かけちがった」結果と捉えるのが妥当かと思われる。

- 23) 古典的大著E. Mâle, *L'art religieux du XIII<sup>e</sup> siècle en France*, 1898年初版、第8版、1948年、641—701頁の概説を参照。

#### 【参考文献】

- Branner,1977: Branner, R. *Manuscript Painting during the Reign of Saint Louis: A Study of Styles*, Berkley-Los Angeles:University of California Press.
- Jonsson, 1995:Jonsson, E.M. *Le miroir. La naissance d'un genre*, Paris: Les Belles Lettres.
- Laborde, 1911-1927: Laborde, A. de. *La Bible moralisée illustrée conservée à Oxford, Paris et Londres: Reproduction intégrale du manuscrit du XIII<sup>e</sup> siècle accompagnée de planches tirées de Bibles similaires et d'une notice*, Paris: Société française de Reproductions de Manuscrits à Peintures.
- Lowden,2000:Lowden., J. *The Making of the Bible Moralisée. I:The Manuscripts, II: The Book of Ruth*, University Park:The Penn State University.
- Tachau, 1998: Tachau, K.H. “God’s Compass and *Vana Curiositas*:Scientific Study in the Old French Bible *moralisée* “, *Art Bulletin* LXXXX:7-33.

#### 【図版リスト】

凡例 聖書抜粋の挿絵の主題と対となる意味講釈の挿絵の主題は、等符号(=)で連結して表示してある。慣例に従い、1ページが掲載する8コマのメダイオンにはAからdまでのアルファベットの整理記号を付してある。大文字AからDは聖書抜粋、小文字aからdは意味講釈のメダイオンを示す。OPL写本では、コマ順は左上から右下 (AaBb)、ついで右上から右下 (CcDd) である。キャプションでは、挿絵の主題を表記した。挿絵の主題とテキストの内容に齟齬が見られる場合にはアステリスク(\*)を付した(齟齬の一因としては註12も参照)。テキストとイメージの関係については、別に考察すること

にしたい。

- 図1. 《アマレク人から家族・財産を奪還するダヴィデ=冥府降下、戦利品の分配=王や聖職者を庇護する神、サウルの負傷=ユダヤ教徒の追放、サウルの死=地獄に堕ちる聖職者》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.146.
- 図2. 《ホロフェルネスに挨拶をするユデト=王侯に恭順の意を示す聖職者》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.198-Dd.
- 図3. 《エゼキエルと4つの生き物と輪=聖書と観想による修養》パリ、フランス国立図書館、ms. lat.11560, fol.187v-Dd.
- 図4. 《御座にひれ伏す24人の長老=神をたたえる聖人たち》大英図書館、MS Harley 1527, fol.120v-Bb.
- 図5. 《ヨセフの子らを祝福するヤコブ=磔刑、ヤコブの子等=キリストの使徒、ヤコブの死=地獄に堕ちるユダヤ人、ヤコブを悼む親族=キリストの死を悼む人々》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.34.
- 図6. 《会衆を疫病により滅ぼす神=聖ステファヌスの殉教、薫香を焚いて罪の贖いをするアロン=善き聖職者、イスラエルの父祖の家に従い杖を取らせる神=司教杖と王杖、芽をふくアロンの杖=キリストの降誕》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.79v.
- 図7. 《エジプトへの逃避=信者を祝福するドミニコ会修道士の背後に迫る兵士》大英図書館、MS Harley 1527, fol.12v.
- 図8. 《右手に7つの星を持ちもろ刃のつるぎがつき出た人の子のようなもの=説教により啓蒙する聖職者》大英図書館、MS Harley 1527, fol.116v.
- 図9. 《植物の創造=民衆に説教をする聖職者、日月星の創造=教会を構成する3つの身分、空飛ぶ生き物と水中の生き物の創造=聖職者と金貸し、家畜と這うものと地の獣の創造=信徒、正直者、諸修道会》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.4.
- 図10. 《楽園にアダムを導く神=善を行い悪から身を守る楽園としての教会、善悪を知る樹についての警告=善行と悪行、エヴァの創造=キリストの右脇腹から出るエクレシア、アダムとエヴァの結婚=聖母子・キリストと浄配》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.6.
- 図11. 《カインの誕生=キリスト教徒を迎えるキリスト・立ち去るユダヤ人》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.7v.
- 図12. 《アベルの暗殺=キリストの磔刑》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.8.

- 図13.《エノクの昇天=使徒たちの昇天》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.9v.
- 図14.《アダムの創造=聖職者たちの審議》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.5v.
- 図15.《チーズ職人を指差し神に嘆願するヨブ=チーズを持つ托鉢修道会士・出産・死去、神が王の腰に帯を巻き祭司たちを連れてゆくのを示すヨブ=地獄の口へ堕ちる姦淫の聖職者と財布を持つ王、花を持つ若者と花弁を散らす樹木の根元の死者を示すヨブ=原罪・楽園追放\*、樹木の萌芽と人の死の比較=生命の樹としてのキリスト》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.215v.
- 図16.《聴罪司祭の鞭をつかみ足下の神を指差す伝道者と愛妾たち\*=病に倒れ死に行く者たちに月日と神を示す修道士\*、飲み食いをして楽しむ者たちと死者に思いをめぐらす伝道者\*=財布を握ってつづらの中に座る男に空の棺を示すドミニコ会士、出産と葬儀に思いをめぐらす伝道者=ユダヤ教徒・多神教徒に背を向け天地をつなぐ福音を広める聖職者、天空の日月を指差す伝道者=信徒を昇らせ異教徒を衰退させる神》、パリ、フランス国立図書館、ms. lat. 11560, fol.62.
- 図17.《天使の導きに従い魚の内臓を取り出すトビア=悪魔の包囲を警戒するキリスト、サラとラグエルに挨拶するトビアとアザリアス=キリストの教えに驚嘆する異教徒、結婚の条件について討議するラグエルとトビア=エクレスシアを異教徒と娶わせるキリスト、魚の心臓と肝臓を焚いて悪魔を退治するトビア=喜捨と洗礼》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol. 193v.
- 図18.《魂を神のもとへ導くドミニコ会士》オックスフォード、ボードリアン図書館、MS Bodley 270b, fol.195v-c.
- 図19.《居眠りをする10人の乙女に花婿の到着を告げる声=主の再降臨をつげる御使いのラッパ》大英図書館、MS Harley 1527, fol.46.

(くろいわ・みえ 研究拠点形成特任研究員)

---

## Iconography of life and death in the *Bibles moralisées* (2): The representation of life and death in the Thirteenth Century

Mie Kuroiwa

---

The three-volume *Bible moralisée*, divided between Oxford, Paris and London (hereafter the OPL codex) is the earliest version containing the Old and the New Testaments in their entirety. In this version, the entire Bible is modified as a coherent history, from the Creation to the Fall of the humankind, then on to a continuous succession of births and deaths, to the coming of the Christ, his Crucifixion and Resurrection and finally to the Last Judgment.

The choice of Bible extracts, its visualization and moralization, and the visualization of the moralization end up in a highly complex interlace of text and image (fig.1) which requires further analyses, but one might be able to simplify the structure of the OPL codex as being not only hierarchical but also dichotomous. The representation of life and death, though not dominant in the codex is by no means absent; it shows on one level how life and death are visualized, on another level, how life and death were conceived in general by the producer and the readers (i.e. king of France and the royal family), and on the final level, what significance can a particular life or death of a biblical character can have to a contemporary reader.

It is through this third level of the representation that it becomes clear that, to the contemporary reader of the OPL codex, the physical reality of life, the fragility of the human body or the fear to die were not relevant. Instead, for instance, the death of an exemplary biblical character such as Moses is interpreted as the prefiguration of Christ's Passion and deeds as causes leading to one's soul's damnation or salvation. Compared to the Late Middle Ages when death and dying becomes a tangible and pressing obsession, the thirteenth-century conceived of life and death in a purely speculative manner.